

令和元年6月23日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01936

研究課題名(和文)セクシュアリティと国民化--マレーシアにおける女性器切除からみる言説の政治--

研究課題名(英文) Sexuality and Nationalization: Politics of Discourse surrounding Female Genital Mutilation in Malaysia

研究代表者

井口 由布 (Iguchi, Yufu)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：80412815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、マレーシアにおける「女性器切除FGM」についての現状を調査することにより、「FGM」をセクシュアリティと身体の支配に関する現代的な問題としてとらえ直し、国民化に位置づけることである。マレーシア北部農村地帯での聞き取り調査から、農村の人々にとって「FGM」は問われてはじめて認識するような、無意識的な実践であることがわかった。しかしながら、2018年度に国際社会で問題となったことから、国内においてもこの実践がイシュー化した。その意味で、現在はカテゴリーとして認識されていないローカルな実践が、近代医療による女性身体の再構築をふくめた国際的「FGM」問題と接合する過程なのかもしれない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義、社会的意義は以下の4点である。第一に、本研究は国際的にも着目されてこなかったマレーシアにおける「FGM」問題に焦点を当て、現地調査を行ったことである。第二に、「FGM」問題における「人権擁護」対「伝統保護」という対立の隘路を、近代医学における女性の身体の管理という視点から再考することで超克しようとしたことである。第三は、公衆衛生学の専門家であるマレーシアにおける研究協力者と共同して調査研究を行ったことである。第四に、アフリカにおける「FGM」研究をしている人類学、歴史学、政治学などの研究者との協働により、「FGM」研究の脱アフリカ中心化を図ったことである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to consider the issue of "female genital mutilation (FGM)" as a contemporary problem related to the control of women's sexuality and bodies and to situate it in the process of national subject formation (nationalization) by examining the current situation of "FGM" in Malaysia. The survey conducted in the rural areas of Northern Malaysia showed that, for villagers the practice of "FGM" was an unconscious practice that was embedded in their daily lives. However, the practice of Malaysia became an issue in Malaysia since 2018 when the international community started to problematize it. In this sense, the issue of Malaysian "FGM" might be in the process of articulation with the global discourse of "FGM" in terms of the modern medical reconstruction of the female body.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：「女性器切除」 ジェンダー 女性の身体 セクシュアリティ 国民化 イスラム 医学 マレーシア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国際社会が「女性器切除 (Female Genital Mutilation: FGM)」に関する調査を本格的に開始したのは、スーダンの首都ハルツームの世界保健機構 (WHO) 事務局職員であったフラン・ホスケンによる *The Hosken Report* の出版がきっかけであったと考えられる。その後 1995 年の北京女性会議や当事者女性たちによる自伝などが出版されるようになるにつれて、「FGM」は問題として広く知られるようになった。WHO は「FGM」を四つのカテゴリーに分けている。第一はクリトリスの一部または全部の切除 (クリトリデクトミー)、第二はクリトリスの切除と小陰唇の一部あるいは全部の切除 (エクシジョン)、第三は外性器の一部または全部の切除および膣の入り口の縫合による狭小化または封鎖 (陰部封鎖)、第四はその他である。

本研究が着目するマレーシアは、経済成長を果たし政治的にも安定している。そのようなマレーシアにおいて「FGM」はイスラム教徒であるマレー系女性のあいだで広く実践されている。マレー系女性の 98% が経験者であるという報告もあった。そうでありながら、マレーシアにおける「FGM」の研究は非常に限られていた。上記の *The Hosken Report* の一部でマレーシアにおける「FGM」の実践が報告されているが、研究論文としては、Abu Rahman Isa, et al, “The Practice of Female Circumcision among Muslim in Kelantan, Malaysia” (1999) と Abdul Rashid et al, “The Practice of Female Genital Mutilation among the Rural Malays in North Malaysia” (2010) という医学的な研究があるのみであった。これらの先行研究から理解できるマレーシアにおける「FGM」の状況は、以下のようにまとめられよう。第一に「FGM」はマレー系女性を中心に広く実践されている。ただし公式の統計はない。第二に、マレーシアでの「FGM」は乳児のときに行うのが主流である。第三に、マレーシアにおいてイスラムの法学意見ファトゥワを管理するイスラム開発庁は、2009 年に条件つきでありながら「FGM」をイスラムの義務 (*wajib* ワジブ) であるとした。第四に、マレーシアで実践されている FGM は、クリトリスの先端に微小な切り込みをいれるものとされ、厳密な意味での「切除」ではないため、Isa et al. (1999) は WHO の 4 類型に当てはまらないので「FGM」ではなく「女子割礼」とであると主張する。第五に、Isa et al. (1999) によれば、「FGM」を経験していると主張する女性たちへの医学的な調査では、どのケースにおいても手術痕が見当たらなかった。第六に伝統的な施術による「FGM」は減少しているものの、病院で行う「FGM」の割合が増加している。第七に、Rashid et al. (2010) の聞き取りの結果によると、他の国や地域とは異なって、「FGM」経験者の女性たちの多くはこれが女性の性的な欲望をより高めると考えていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、マレーシアにおける「FGM」についての現状を調査することにより、「FGM」をセクシュアリティと身体の支配に関する現代的な問題としてとらえ直し、マレーシアにおける国民的な主体形成の中に位置づけることである。近年のイスラム復興により、マレーシアにおける「FGM」は改めて見いだされ強化されているのではないかという仮説のもと、本研究ではイスラム教徒であるマレー系の文化を中心としたナショナリズムと多民族社会を強調するナショナリズムとがせめぎ合うマレーシアにおいて、「FGM」が女性のセクシュアリティの支配をととしての国民主体の構築に重要な役割を果たしていると考えられる。また本研究は「FGM」を性器加工という観点から再検討し、アフリカにおける実践を中心にした「FGM」研究と分類法の再考をも提起する。なお本報告は「FGM」を自明のカテゴリーとしないという立場から、カギカッコに入れて使用している。

3. 研究の方法

本研究は、以下の二つの大きな柱をもって開始された。一つは、マレーシアにおける「FGM」に関する資料を収集し、その現状を把握することである。もう一つは、「FGM」を身体とセクシュアリティの支配という観点から読みなおし、国民主体形成との関係で位置づけることである。資料収集は、以下の二つの方向から行った。第一には学術論文、国際機関、NGO、その他 (新聞、雑誌、ブログなど) においてマレーシアの「FGM」について書かれたものを収集することである。第二には、「FGM」を実践しているマレーシア北部の村落における現地調査である。現地調査に関しては、RCSI&UCD マレーシア・キャンパスの公衆衛生学教授であるアブドゥル・ラシドの協力をえて、605 名の農村在住女性への量的調査、伝統的な方法で「FGM」を実践している施術者へのインタビュー、農村在住の男女グループへのフォーカス・グループ・ディスカッションを行なった。2015 年度に現地予備調査を行い、2016 年度に現地での長期滞在をしながら聞き取りの調査を行なった。その後、2017 年度と 2018 年度には現地においてフォローアップの調査を行なった。

4. 研究成果

本研究の直接の研究成果としては、査読付きの雑誌論文 2 本を出版したほか、学会において 7 回の成果報告を行なった。これ以外に現在投稿中の雑誌論文が 2 本あり、国民化という側面から本研究につながる著書 1 冊を出版した。

(1) 「FGM」をめぐる理論的な問い

口頭報告「マレーシアにおけるセクシュアリティと身体の政治——女性器切除 FGM の現状——」(2015 年) は世界とマレーシアにおける「FGM」問題の現状についての報告である。つ

づく報告「国民化とセクシュアリティ——マレーシアにおける「女性器切除」——」(2016年)は、女性の身体とセクシュアリティと国民化という視点からこれまでの「FGM」研究をたどった。この報告の目的は、前近代的で非人道的な実践として「FGM」を批判することや、伝統的な価値観としてこれを擁護することにはなく、むしろ「FGM」を近代的な問題として、とりわけポスト植民地における国民化にかかわる問題としてとらえなおすことにある。この二つの報告は、論文「女性器切除」と言説の政治——近代医学的まなざしの自明性を問い直す——(2019年)として結実した。

「FGM」をめぐる国際社会では、女性の人権と健康の侵害であるという「普遍主義」と現地の伝統であるとする「文化相対主義」による対立がくりひろげられてきた。この論文では、「FGM」論争を言説としてとらえ、ポスト植民地における女性の身体とセクシュアリティをめぐる政治のなかに位置づけることで、この対立がいずれも近代医学の普遍性という暗黙の前提の上に成り立っていることを示した。

「FGM」論争は、国際機関や西洋フェミニストによる「普遍主義」と「FGM」をさまざまな身体加工の一つとして考える文化人類学者による「文化相対主義」との対立によって特徴づけられてきた。1990年代からこの論争を言説の問題としてとらえる動向が開始し、ポスト植民地における自己表象、西洋における家父長制の隠蔽、西洋のフェミニストによる帝国主義的搾取への加担などの問題が論じられた。

この論文では、「FGM」論を言説としてとらえるこれまでの動向において、じゅうぶんに着目されてこなかった医学的まなざしについて論じ、女性の身体を対象化する医学的まなざしの強力さを、研究者たちの分類への執拗なこだわりから明らかにした。「FGM」の研究と分類のプロジェクトは植民地における医療の制度化とともに開始し、人類学者の研究や宗教指導者の議論をも包摂し、現在のWHOによる4分類において頂点を極めている。「FGM」を医学的に分類するプロジェクトは、国際機関や各国が行う保健政策、NGOによる人道支援、宗教組織の行う施策へと変換され、植民地において開始した近代医学における管理体制の、ポスト植民地的な展開の一つといえるかもしれない。

(2) マレーシア北部農村における「FGM」の実態

上でも述べたように代表者は2016年においてマレーシア北部農村において現地調査を行なった。605名の農村女性への量的調査では、「FGM」の実践の実態と意識について質問紙を用いて調査を行なった。この結果については、海外共同研究者であるラシドとの共著論文(“Female Genital Cutting in Malaysia: A Mixed-Methods Study”)において発表した。調査では対象の女性たち99.3%は「FGM」を経験していると主張していた。彼女たちの87.6%は、この実践がイスラムによる義務であると考え、99.3%が今後も継続されるべきだと考えていた。しかしながら、産婆や現地のイスラム指導者は「FGM」を必ずしもイスラムの義務ではないと答えた。若い世代ほど伝統的な施術者(産婆)ではなく、医師による施術を受けており、若い世代ほど医師による施術を希望していた。実態の面でも人々の意識の面でも医療化が進展していることが明らかになった。

「FGM」を施術する8名の産婆へのインタビューの結果は、口頭報告“Changing Views Towards the Female Body in Modernization and Globalization: A Case of the Practice of “FGM” in Northern Malaysia Based on Interviews to Midwives”を行い、論文“Changing Views Towards the Female Body in the Era of Modernization and Globalization: The Practice of ‘FGM’ in Northern Malaysia, Based on Interviews with Midwives”として現在投稿中である。現在、マレーシアの伝統的な産婆の多くは出産への立会いはせず、産後のマッサージを主に行なっている。「FGM」の施術をする産婆は減少している。インタビューをした産婆たちの年齢は63歳から83歳で、目が見えなくなって施術をやめた産婆もいた。産婆たちは公式の訓練を受けておらず、先輩の産婆から見て覚えたと言った。産婆たちの多くは、ナイフの先でクリトリスを突くなどして血を一滴にじませて施術を完了させるという。その意味では、これらの実践は切除 mutilation ではない。産婆たちは「FGM」を行う理由をイスラムに求めていたが、義務であるという産婆もいれば、村人がやってほしいというからやっているだけだと答える産婆もいた。村の女性への量的調査や村人へのフォーカス・グループ・ディスカッションの結果と異なり、産婆たちのなかには、将来この実践がなくなったとしてもかまわないと答えるものもいた。

フォーカス・グループ・ディスカッションは1グループ5名から6名で、20代から40代の女性グループ、50代以上の女性グループ、男性グループの3グループで行なった。村人たちは「FGM」を現地の言葉で「女性の割礼」と表現しており、男性と同じように女性も割礼をするのが当然であり、イスラム教徒の印づけであると考えている。ただし男性の割礼と異なり、「FGM」には特別な儀式や共食儀礼がなく、女性たちのほとんどは自分がいつそれを行なったかを両親から知らされたことはなかった。産婆たちと同様に、村人たちはアフリカにおける「FGM」問題について聞いたことはなく、イスラム教徒の共同体では世界中どこでも自分たちと同じような「割礼」をしていると考えていた。ディスカッションの結果については、2017年に口頭発表(“Female Body and Sexuality in Postcolonial Malaysia: People’s Views toward “Female Genital Mutilation” in Malaysia”)を行なった。

(3) マレーシアにおける「FGM」問題

本研究では、近年のイスラム復興により、マレーシアにおける「FGM」は改めて見いだされ強化されているのではないかという仮説を立てていた。だが農村での調査からは、事態がもう

少し複雑であることが推察される。農村の人々は、「女性の割礼」についての話を聞いていても、いつのまにか男性の割礼へと話が横滑りしてってしまう。農村では「FGM」という単独のカテゴリーは成立していないのだろう。その意味で、農村における「FGM」実践は、社会のなかに埋め込まれた当たり前で無意識的なものであるといえるかもしれない。それは調査員に「FGM」を経験していますかと質問されてはじめて、それとして認識するものなのかもしれない。(量的調査では99%が「FGM」を経験していると主張していたものの、彼女たちのいったい何%が両親に確認したのだろうか。)

たしかにマレーシアでもイスラム化が進行している。それは表面的にはアラブ化(アラブ風の建築物、アラブ風のファッション、アラビア料理、アラブ風の音楽、アラビア語やアラビア文字)として現れている。ただし、マレー人が参照するアラブ諸国のほとんどにおいて「FGM」は行われていない。農村の人々の「FGM」の実践とアラブ化としてのイスラム化は不連続のようである。

しかしながら2018年11月にマレーシアにおける「FGM」が国際社会において「問題」となったことをきっかけにして、人々のあいだでの意識が変化するかもしれない。自分たちの伝統が侵害されることへの反発が起きるのか、イスラム教徒の多くがイスラムの義務ではないといっていることを受け入れるのか、「FGM」は宗教ではなく文化的実践であるとみなしていくのかは定かではない。その意味では、国民的な言説編成への「FGM」の組み込みは2018年あたりから開始されたということができるとはしないか。なお、マレーシアにおける人々の意識については、現在投稿中の論文「セクシュアリティと女性の身体からみるマレーシアにおける「女性器切除」」において展開した。

(4) 医療化、東南アジアにおける「FGM」、FGM研究におけるアフリカ中心主義への批判的介入、今後の展望

医療化については国際共同研究強化の研究課題として2018年に集中して調査を行った。現在は分析を進めている最中である。インドネシアをふくめた東南アジアにおける「FGM」問題についてはこれまでに文献研究を行い、2018年に国際学会の口頭発表“The Practices of “Female Genital Mutilation””において報告した。今後はインドネシア、南タイだけでなく、カンボジアにおけるイスラム共同体での「FGM」実践について、国際的な共同研究を組織したうえで、調査をしていく予定である。アフリカにおける「FGM」研究の動向については、ケニアの「FGM」の研究をしている宮地歌織氏、戸田京子氏、エチオピアの「FGM」研究をしている宮脇幸生氏と国際学会で共同のパネルを組み(2016年、2017年、2018年)、日本における「FGM」研究者とのネットワークを形成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- 1) Yufu Iguchi, “Female Genital Cutting in Malaysia: A Mixed-Methods Study” with Abdul Rashid, *BMJ Open*, Volume 9, Issue 4, April 2019.
- 2) 井口由布 「「女性器切除」と言説の政治——近代医学的まなざしの自明性を問い直す——」アブドゥル・ラシドとの共著 『年報カルチュラル・スタディーズ』7巻(2019年)

〔学会発表〕(計 7 件)

- 1) Yufu Iguchi, “The Practices of “Female Genital Mutilation” (16th Asia Pacific Conference, Ritsumeikan Asia Pacific University, Dec. 1, 2018)
- 2) 井口由布 「女性の身体という問題から考えるマレーシアの「女性器切除」問題“Female Genital Mutilation” in Malaysia from the Viewpoint of the Female Body」国際ワークショップ「マレーシアにおける「女性器切除」」Female Genital Cutting in Malaysia(大阪府立大学女性学研究センター、2018年10月29日)
- 3) 井口由布 「女性の身体という問題からみるマレーシアの「女性器切除」問題“Female Genital Mutilation” in Malaysia from the Viewpoint of the Female Body」(日本マレーシア学会関東地区研究会、2018年10月27日)
- 4) Yufu Iguchi, “Female Body and Sexuality in Postcolonial Malaysia: People’s Views toward “Female Genital Mutilation” in Malaysia” (15th Asia Pacific Conference, Ritsumeikan Asia Pacific University, Nov. 12, 2017)
- 5) Yufu Iguchi, “Changing Views Towards the Female Body in Modernization and Globalization: A Case of the Practice of “FGM” in Northern Malaysia Based on Interviews to Midwives” (14th Asia Pacific Conference, Ritsumeikan Asia Pacific University, Nov 5, 2016)
- 6) 井口由布 「国民化とセクシュアリティ——マレーシアにおける「女性器切除」——」(同志社大学 奄美-沖縄-琉球 センター、火曜会、2016年5月11日)
- 7) 井口由布 「マレーシアにおけるセクシュアリティと身体の政治——女性器切除 FGM の現状——」(13th Asia Pacific Conference, Ritsumeikan Asia Pacific University, Nov 7-8, 2015)

〔図書〕(計 1 件)

- 1) 井口由布 『マレーシアにおける国民的「主体」形成——地域研究批判序説——』(彩流社、

2018年)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

研究代表者氏名：井口由布
所属機関名：立命館アジア太平洋大学
学部名：アジア太平洋学部
職位：教授
研究者番号：80412815

(2) 研究協力者（海外）

研究協力者氏名：アブドゥル・ラシド
ローマ字氏名： Abdul Rashid
所属機関名：RCSI&UCD マレーシア・キャンパス、公衆衛生学部
職位：教授

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。